

# ディカーニカ近郷夜話 後篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

イワン・フョードロ※ [#濁点付き片仮名中、1-7-83] ツチ・シュポーニカとその叔母

青空文庫



これは、ガデヤーチからよくやつて来たステパン・イワーノヰツチ・クローチカに聞いた物語ぢやが、はなしこれには一つの記事来歴がついてゐる。ところで、元来このわしの記憶といふやつが、何ともはやお話にならぬ代物で、聞いたも聞かぬもとんとひとつでな。いはば、まるで篩ふるひの中へ水をつぎこんだのと変りがないのぢや。我れながら、それを百も承知なので、わざわざ彼にその物語はなしを帳面へ書きつけておいて呉れるやうに頼んだ次第ぢや。——いや、どうか達者でゐて貰ひたいもので——あの先生わしには何時もじつに親切な男でな、筆をとるなり、さつそく書いておいて呉れたわい。わしはその帳面を小卓こづくろの押匣へしまつておいたのぢ

や。そら、諸君も御存じぢやらう、あの、戸口を入つた直ぐとつ  
つきの隅にある小卓こづくゑなんで……。いやはや、これはしたり、す  
つかり忘れてをつたが——諸君はまだ一度もわしの家へ来られた  
ことがなかつたのぢやな。ところで、わしがもう三十年このかた  
連れ添ふうちの婆さんぢやが、恥をいへば目に一丁字もない女な  
んで。この婆さんがある時、何かの紙を下敷にして肉饅頭ピロシユキを焼  
いてござるのぢや。時に親愛なる読者諸君、うちの婆さんときた  
ら、その肉饅頭ピロシユキを焼くのがめつぱふ上手なのぢや、あれくらゐ  
美味うまい肉饅頭ピロシユキはどこへ行つても食へつこない。それはさて、何  
気なくその肉饅頭ピロシユキの下敷にしてある紙を見ると——なにか文字  
が書いてある。へんに思ひあたる節があるので、小卓こづくゑのところ

へ行つてしらべて見ると、どうぢやらう——くだんの帳面が半分  
くらゐの丁数になつてをるではないか！ あとは残らず婆さんめ、  
肉ピロシユキ饅頭を焼くたんびに、引きちぎつては使つてしまひをつたの  
ぢや！ だが、どうしやうがあらう、まさかこの老齡としで、掴みあ  
ひができるではなしさ！ 去年のことぢやが、たまたまガヂヤー  
チをとほつたので、まだその市まちへさしかかる前に、この一件につ  
いてステパン・イワーノヰツチをたづねることを忘れまいとて、  
わざわざ\*忘れな結びをしておいたほどぢや。それだけならまだ  
しも、市まちなかでくしやみが出たら、それをしほに必らずあの仁の  
ことを想ひ出さうと、しかと我れと我が胸に約束しておいたのぢ  
やが、それもこれも無駄ぢやつた。市をとほりながら、くしやみ

もしたし、ハンカチで鼻汁はなもかんだけれど肝腎のことはすつかり忘れてしまつてゐたのぢや。で、やつと気がついた頃は、市の関門を六露ウエルスト里ばかりも距たつてゐた。どうもしかたがない。尻切蜻蛉のまままで印刷にまはすことになつてしまつた。だが、この物語のさきがどうなるか、是非とも知りたいとお望みの方には、ひとつガデヤーチへ出むいて、ステパン・イワーノヰツチに訊ねていただくまでのことぢや。あの仁は大悦びでこの物語を、恐らくは初めからしまひまで、お話しすることぢやらう。住ひは石造の教会堂のつい近所でな。あすこのとつつきに小さい横町があるが、その横町へ曲るとすぐ、二つめか三つめの門がそれぢや。あ、さうさう、それよりもよい目標めじるしは、庭に太い棒が立つてゐて、

それに鶉がかけてあり、草いろの女袴スカートを穿いた、ふとつちよの女が出迎へる（ステパン・イワーノキツチが独り者だといふことを御承知おき願ふのも妨げにはなるまい）と、それが彼の邸なのぢや。それとも市場で先生をつかまへることも出来る。奴さんはそこへ毎朝、九時までには必らず出かけて、自分の食膳を賑はす魚菜をみたてたり、アンテイープ神父や、それから請負商の猶太人などと話し込んでゐるのが平素いつものならばしななでな。それになんな派手な花模様のズボンを穿いたり、鬱金うこんの南京縐子で出来たフロツクコートを著てゐる人間は、あの男のほかには一人もゐないから、すぐに見分けがつく。もう一つの目標めじるしは、歩く時にきまつて両腕をぐるぐる振りまはす癖のあることぢや。今は亡き彼あ

地ちちの陪審官デニス・ペトロロキツチは、遠くから彼の姿を見かけると、御覧なさい、御覧なさい、そら、あすこへ製粉場こなひきばの風車が歩いて来ますぜ！ と、きまつてさう言つたものぢや。

忘れな結び 用事を忘れず思ひ出すよすがに、ハンカチに結びこぶを作ること。

一 イワン・フョードロキツチ・シユポーニカ

イワン・フョードロキツチ・シユポーニカは、もう四年まへから軍職を退いて、所有農園もちむらのウイトウレベニキに住んでゐる。彼がまだワニユーシャと呼ばれた少年時代には、ガデアーチの郡立

小学校へかよつてゐるが、特筆すべきことは、彼がきはめて品行方正な、ぬきんでて勤勉な児童だつたことで、露西亞文法の教師ニキーフォル・テイモフェーキツチ・デエプリチャースティエは、いつも、受持児童が残らずシュポーニカのやうな勤勉家ばかりだつたら、自分は楓樹かへでの定規などを教室へ持つて来るには及ばぬのだがと、言ひ言ひしたものだ。いつも彼は、彼自身が告白したとほり、怠け者や悪戯つ児の手をその定規で打ち草臥くたびれてしまふ有様だつた。シュポーニカの筆記帳はいつもきれいで、いつぱいに罫がひいてあつて、どこを開いて見ても斑点しみ一つついてゐなかつた。彼はいつでもおとなしく席につくと、手を拱んで、じつと教師に目をそそぎ、決して、自分の前の席に坐つてゐる級友の背中

へ紙片かみきれをぶら下げるとか、腰掛に彫刻をするとか、それから、

先生が来るまで目白押しをやるといふやうなことがなかつた。もし誰かが驚筆ペンを削るのにナイフの要るやうな場合には、イワン・フョードロキツチが何時もナイフを用意してゐることがわかつてゐたので、取敢へず彼に借用を申し込んだものだ。するとイワン・フョードロキツチは——いやそのころは単にワニユーシヤだつたが、——鼠色の制服の釦ぼたんあな孔あなにさげてゐた小さい革袋ケースからナイフを取り出して、但しペンを削るのにナイフの刃尖はさきをつかはな

いで欲しい、それにはちやんと、適当な刃の鈍い個所があるからと、断るのだつた。かうした美点は、あの粗羅紗の外套と痘瘡あばただらけの顔を入口へにゆつと現はす前に昇降口でやる咳払ひ一つで、

全教室を恐怖のどん底におとし入れる、拉典語の教師の注意をす  
ら、忽ち彼の上へ牽きつけずにはおかなかつた。いつも教壇に二  
振りの杖笞を用意して、生徒の半数に膝ひざだち立の罰を喰はせる、こ  
の怖ろしい教師が、クラスのうちには遥かに良く出来る連中が沢  
山あつたにも拘らず、イワン・フョードロキツチを指導委員に  
任命した。さて、茲に彼の全生涯に影響を及ぼすに至つた一大事  
件の出来したことを見逃しにする訳にはゆかぬ。彼の指導に委ね  
られた生徒の一人が、或る学課がまるで出来なかつた時に、指アウデ  
導委員イートルを買収して採点簿に甲を入れさせようと思つて、バタを  
塗つた揚煎餅ブリーンを紙にくるんで教室へ持つて来たのだ。イワン・フ  
ョードロキツチは公明な心の持主だつたが、をり悪しくその時は

ひどく空腹だったため、この誘惑に打ち克つことが出来なかつた。彼は揚煎餅ブリーンを受け取ると、本を前に立てかけておいてムシヤムシヤやり出したが、ひどくそれに夢中になつてゐたものだから、不意に教室の中がまるで死んだやうにしいんと鎮まり返つたことに気がつかなかつた。彼がハツと我れに返つた時には、すでに粗羅紗の外套の袖口からぬつと出た怖ろしい手が彼の耳を掴んで、教室の真中へ引きずり出してゐた。『揚煎餅ブリーンをこちらへお出し！

お出しと言つたら、この碌でなしめ！』さう言ふなり、怖ろしい教師はバタつきの揚煎餅ブリーンを指で摘んで、窓から外へ投げ棄てた。そして運動場を駈けつてゐる児童たちに向つて、それを拾つちやならんぞと厳しく禁じておいてから、すぐにその場でイワン・

フョードロキツチの両手をいやといふほど鞭打つた。——いかさま揚煎餅ブリーンを受け取つたのはその手で、からだの他の部分には罪がないとでもいふのだらう。それは兎も角、このことがあつて以来、それでなくても生まれつき小胆な彼に、なほさら臆病風が染みこんでしまつたのだ。恐らくこの事件そのものが因を成して、後年、彼をして絶対に役所勤めに入らうといふ望みを起させなかつたものに違ひない——この経験から、誤魔化といふことの難かしさをつくづく悟つたがために。

彼が二学年に進級して、それまでの簡易釈義書や四則算の代りに、詳細釈義書だの、修身だの分数だのを習ひかかつた時には、年ももう満十五歳になつてゐた。だが、深く進めば進むほどいよ

いよ学課は煩瑣になるばかりだつたし、ちやうど、父の訃報にも接したりしたので、それからあと二年のあひだ<sup>アヒダ</sup>在学してからの、母の諒解を得て、P××歩兵聯隊へ入隊した。

このP××歩兵聯隊は、他の多くの歩兵聯隊が属してゐる類ひとは全く趣きを異にして、たいてい村落に駐屯してゐたにも拘らず、へたな騎兵聯隊などの及びもつかぬくらゐ、素晴らしく景氣のいい聯隊であつた。大部分の士官が竜騎兵にも負けず凍火酒ウイモロズキをあふり、猶太人の鬢髪ペイスを掴んでは引きずりした。中にはマツルカを踊る者さへあつて、P××歩兵聯隊の聯隊長は社交の席で人と談話を交はすやうな場合には、いつも口癖のやうに、それを吹聴することを忘れなかつた。『自分の聯隊には、』と、彼は

つでも一言いつては腹を撫でながら、語るのだつた。『マヅルカを踊る者が沢山をりますぢや、いや実に沢山をりますぢや、非常に沢山!』このP××歩兵聯隊の発展ぶりを更によく読者に示すため、士官のうちに、途方もない賭博者ばくちうちで、軍服や軍帽から外套はおろか、下緒さげから、まだその上に、どんな騎兵連の間を捜しつても到底見つきりさうにない下著の端に至るまで、すつかり賭けてしまふといつた、恐ろしい豪傑が二人もゐたことを、つけ加へておく。

かうした同僚にとりまかれてをりながら、イワン・フョードロキツチの臆病さ加減には少しも変りがなかつた。彼は凍火酒ウイモロズキを嗜まず、ただ午餐ひるめしと晚餐ばんめしの前に火酒ウオツカを一杯やるだけで、マ

ヅルカも踊らなければ、<sup>バンク</sup>銀行 もやらなかつたので、自然、い  
 つも独りぼつちである他はなかつた。そんな訳で、他の連中がそ  
 れぞれ土地の馬を雇つて小地主の家々へ出かけて行くやうな時に  
 も、彼は自分の室にぼつねんと坐つて、ひとり、善良で、もの静  
 かな気性に適つた所作に耽るのが常で、釦を磨いたり、占ひ本を  
 読んだり、部屋の隅に鼠罫を仕掛けて見たりしたが、最後には、  
 軍服を脱ぎ棄てて、寝台の上に横たはるのが落<sup>おち</sup>であつた。

その代り聯隊ちゆうにイワン・フォードロキツチくらゐ几帳面  
 な者はなく、また自分の分隊の指揮が非常に良く行き届いてゐた  
 ので、中隊長はいつも彼を模範下士に選んだ。そんな次第で昇進  
 もはやく、旗手の地位を贏ち得てから十一年たつて、少尉に任命

された。

この間に母の亡くなつた知らせを受け取つたが、母の親身の妹かんで、彼の幼年時代に乾梨ほしなしや、非常に美味しい薬味麵麩などを持つて来たり、わざわざガヂャーチへ送つて呉れたりまでしたので、僅かに憶えてゐる叔母（この叔母は、母と仲違ひをしてゐたので、その後、イワン・フォードロキツチは絶えて久しく会はなかつたが）——この叔母が、もちまへの親切気から、彼の小さい持村の管理を引き受けたといふことを、事の序でに手紙で彼の許へいつてよこした。

イワン・フォードロキツチは、この叔母の行き届いた思慮分別を信じきつてゐたので、従前どほり引きつづき勤務につくことが

出来た。他の者が彼の地位に在つたならば、これだけの官等を贏ち得ては、さぞかし思ひあがつたことであらうが、驕り高ぶるなどといふことは、まるで彼の与かり知らぬところで、少尉になつてからも、その昔、旗手の地位にあつた頃のイワン・フョードロヰツチといささかの変りもなかつた。この、彼にとつて特筆すべき出来ごとがあつてから四年の後、彼は聯隊と共に、マギリヨフスカヤ県から大露西亜への行軍に出発しようとする間際になつて、次ぎのやうな手紙を受け取つた――

拜啓、御許さま宛に肌着として毛糸の靴下五足と薄麻の襯衣四枚、お送り申しあげ候。なほ御相談申し上げ度き儀は、御承

知の如く御許様にも最早重要なる官位を得られ候ことにもあり、且つ今ははや家事に携はるべき年配ともお成りなされ候こと故、このうへ軍隊に御奉公なさる筋はさらさら之無かるべく存じ候。妾ことも最早寄る年波にて御許さまに代りて家事万端のきりもりをするのにいたく難渋いたし居り候。なほ親しくお目もじ致し御許さまに申しあげ度きくさぐさの用件も之有り候へば、是非とも御帰省なさるべく申し入れ候。呉々も嬉しき嬉しきお目もじの叶ふことを念じて相待ち居り候。かしこ。

ワシリーサ・ツプチェキスカ

愛甥イワン・フョードロキツチどの

二伸、うちの畠に誠に珍らしい蕪が出来ました。蕪といふよりはいつそじやがいもに似た恰好をしてをりますよ。

この手紙を受け取つてから一週間の後、イワン・フョードロフツチは次ぎのやうな返事を書いた。

拝復、下着お送り下され有難く御礼申し上げ候。殊に小生の靴下は何れも甚だしく古もののみにて、既に再三再四従卒をして繕はしめ候ため、著しく窮屈を覚えをりし次第に候。さて御申越しの小生が服務に關しての御意見、一々御尤もと存じ候。就ては、一昨日退職願ひを差出し置き候へば、許可の辞令さが

り次第、早速、幌馬車を備ひ、帰郷の途に上るべき予定に御座候。先般御申越しの、西比利亜麦とか申す小麦の種子に就いての御依頼は、甚だ残念ながら、叔母上の御満足を充たし申すこと能はず候。当マガリヨフスカヤ県下一帯、何処にも左様な物は見当り申さず候。なほ当地に於ては大部分養豚には\*ブラーガに十分熟れたる麦酒を混じて与へをり候　々　敬具

小甥イワン・シュポーニカ

ワシリーサ・カシユパーロヴナ叔母様

ブラーガ　白色を帯び、ビールに似た、下等な酒精飲料。

又、ビール醸造用の麦芽汁の醗酵したのもブラーガ

と呼ぶ。

つひに、中尉に昇進して退職の許可を得たイワン・フョードロ  
 ンツチは、\*マギリヨーフからガデヤーチまで四十留ルーブリの約束で猶  
 太人の馭者を傭つて、幌馬車の中に座を占めた。時あたかも樹々  
 の小枝に新緑の若葉もなほ疎らに、大地のすべてが鮮やかにすが  
 すがしい青草に蔽はれ初め、野辺の到る処に春の息吹の感じられ  
 る頃であつた。

マギリヨーフ マギリヨフスカヤ県の首都。ドニエープ  
 ルに臨んだ河港。

## 二 道中

道中には、さして目覚しい出来ごともなかつた。彼はもう二週間あまり旅をつづけてゐた。恐らく、それよりずっと前にイワン・フョードロキツチは村へ帰り著いてゐた筈であるが、信心ぶかい馭者の猶太人が土曜日ごとに安息日を守り、馬衣に身を包くるんで、一日ぢゆう祈禱に過したからである。しかしイワン・フョードロキツチは、先刻も述べた通り、つひぞ退屈といふものを感じたことのない人物であつた。で、その暇に彼は鞆を開けて、下著を取り出し、ためつすがめつ、それが十分に洗濯が出来てをるか、きちんと畳まれてをるか、検査をしたり、もはや肩章掛のない、

新調の軍服についてゐる綿毛わたげを、叮嚀に払ひ落したりして、再びその品々を極めて大切さうに片づけた。彼は書物を読むことは、概して好きでなかつた。時々古い本を覗いてゐるやうなことがある。つても、それは、もう幾度も読んで目に馴れた文字を見るだけの楽しみからであつた。ちやうど都会人が、別に新らしい珍談を聴かうがためではなく、ただ其処でいつからとはなしに雑談に花を咲かす癖になつてゐる仲間の顔を見るために、毎日、倶楽部へ出かけて行くのと同然である。また格別社交的なもくろみがあるでもなく、ただ、ずらりと活字になつてゐる氏名を見るのがこの上もない楽しみで、甚く面白さうに職員録を繰返し繰返し、日に何度といふほど読み返す官吏にも似てゐる。ああ、イワン・ガウ

リーロキツチ何某なにがしか！……こんな風にその官吏は独りでぼんやり繰返すのだ。ああ！此処に俺れも出てをるわい！ふうむ！……かうして次ぎにも亦、再び同じ感歎詞を以つて、それを読み返すのである。

二週間の旅程を経て、イワン・フォードロキツチは、ガヂャーチの手前百露里足らずの地点にある一部落へ到着した。それは金曜日だった。彼が猶太人とともに幌馬車で旅舎へ乗りつけた時には、もうとうに日は沈んでゐた。

その旅宿は、田舎の小さい村々に設けられてゐる他の旅宿と何ら異るところがなかつた。そこではきまつて、旅客に、馱馬か何ぞのやうに、乾草と燕麦とをひどく熱心に饗す応すめるけれど、もし、

旅客があたりまへに、十人並の朝食が摂りたかつたなら、彼は厭でも応でも食慾を次ぎの機会まで我慢するより他はなかつた。さういふことをよく承知してゐたから、イワン・フョードロキツチは前以つて、二連の輪つなぎ麵ブーブリキ麩と腸詰の用意をして来たので、かうした宿屋で決してきらしたことの無い火酒ウオツカを一杯だけ注文すると、たたきの床へ脚をしつかり埋め込んだ櫛の食卓に向つてベンチに腰をおろして、夕餉をしたためにかかつた。

さうかうしてゐるところへ、馬車の轍の音がしたけれど、その馬車は長いこと内庭へ入つて来なかつた。甲高い声が、この居酒屋をやつてゐる老婆と罵りあつてゐた。『ぢやあ馬車を入れるけれど、』さういふ声がイワン・フョードロキツチの耳に入つた。

『その代り、お前んとこで、ただの一匹でも南京虫が俺を刺したが最後、擲りつけて呉れるぞ、誓つて擲りつけて呉れるぞ、このおいぼれ魔法使女め！<sup>まほふづかひ</sup>そして乾草の代は鍔一文だつて払ふこつちやないぞ！』

一分ばかりの後、入口の戸があいて、紺のフロックコートを著こんだ、恐ろしくふとつた男が入つて来た、といふよりは這ひずり込んだと言つた方がよいかもしれない。彼の頭は短かい猪頸の上に泰然自若として鎮座してゐたが、そのまた頸が、彼の二重頤のために一層ふとく思はれた。この男は一見して、些々たることには決して心を勞することなく、その全生活が坦々として油の上を迂るやうに滑らかに　　転してゆくといつた人物であることが領

かれた。

「いや、今晚は！」と、その男はイワン・フョードロキツチを眺めて、挨拶した。

イワン・フョードロキツチは無言のまま、会釈を返した。

「失礼ですが、どなた様でございましたかしら？」と、肥つた新来の客は言葉をつづけた。

かうした質問に依つて、イワン・フョードロキツチは、是非なく席を立つて、聯隊長から物を尋ねられる時にいつものやうに、直立不動の姿勢を取つた。

「退職歩兵中尉イワン・フョードロフ・シュポーニカと申します。さう彼は答へた。」

「甚だ立入ったことをお尋ねいたしますが、どちらへお越しになるのでございますか？」

「自分の所有農園、ウイトウレベニキへ帰りますので。」

「なに、ウイトウレベニキですつて！」と、この無遠慮な質問者は叫び声をあげた。「いや、これはどうも、あなた、いや、これはどうも！」さう言ひながら彼は、まるで誰かが捉まへてゐて放さないのか、それとも人ごみの中を掻き分ける時のやうに、両手を振りまはしながら、こちらへ近づくと同時に、イワン・フョードロキツチを抱きかかへて、まづ右の頬を、次ぎに左の頬を接吻した。イワン・フョードロキツチにはこの接吻がひどく気持がよかつた。といふのは、この見知らぬ男の大きな頬が、彼の唇に柔

かい座クツシヨン 褥シヨの役目をしたからである。

「いやはや、これはどうも、あなた、どうかひとつお心易く願ひたいもので！」と肥ふとつちよ大漢は言葉をつづけた。「私もやはりガデヤーチ郡の地主でして、然もあなたとはお隣り同士なんで。あなたのウイトウレベニキ村からは、ほんの五露里も距れてをらぬホルトウイシチエが私の持村で、姓名なまへはグリゴリー・グリゴリーエキツチ・ストルチエンコといひますんで。是非とも、是非とも、あなたがホルトウイシチエへ御来遊下さるなきやあ承知いたしませんよ。今はちよつと急用でいそいでをりますが……。これあどうしたんだい？」と、肘つぎに補布つぎの当つた哥薩克風の長上衣を著た彼の従僕の少年が入つて来て、当惑さうな面持で、食卓の上へ包

み物と木箱とを置くのにむかつて、柔和な声で言葉を掛けた。

「何だいこれは、何だと？」さう言ひながら、グリゴリー・グ  
リゴリーエキツチの声はいつとはなしに段々荒くなつた。「俺が  
それを此処へ持つて来いとお前にいひつけたのか、おい？ それ  
を此処へ持つて来いと言つたかといふのだよ、恥しらずめ！ 俺  
は鶏を先きにあたためるやうにいひつけたぢやないか、悪党め！  
あつちへ行つてろつ！」彼は足を踏み鳴らしながら呶鳴りつけ  
た。「待て、化物野郎！ 罫の入つとる小函は何処にあるのだ？  
さて、イワン・フォードロキツチ！」と、彼は盃にナストイカ浸酒を  
なみなみとついで、言葉をつづけた。「どうか一つ、持薬がはり  
におやりなすつて！」

「いや、実のところ、から駄目なんでして……もうやりましたので……。」「イワン・フォードロキツチは、しどろもどろに口ごもりながら、答へた。

「いや、そんなことを仰つしやるものぢやありませんよ、あなた！」と、地主は声を高めて言つた。「それあいけませんよ！ 召し上つて下さるまでは此処を動きませんからね……。」「

イワン・フォードロキツチは、いなみ難きを見て取ると、まんざら悪くもなささうに、ぐつと一と息に呑み乾した。

「これは牝めんどり鶏どりなんでして、あなた。」と、肥つたグリゴリー・グリゴリーエキツチは、木箱の中で丸焼の鶏をナイフで切り取りながら、語をついだ。「お断わりしておかなければなりません

が、宅のヤヴドーハといふ料理婦は時々ひどい大酒を喰くらひまして、どうかすると、からからに焼き過ぎてしまふのです。おい、こら、小僧つ！」と、この時、哥薩克風の長上衣を著た少年が羽根蒲団と羽根枕とを運んで来たのに対つて、呶鳴つた。「俺の寢床は土間の真中に敷け！ 気をつけて枕の下には乾草を高く積んでおくのだぞ！ それから、この家の婆ああざこきの麻扱あざこきから苧屑を一掴み取つて来て、俺の耳の孔に詰めるのだ！ お話しなければ分りませんが、あなた、私は一度、或る露西亞の酒場で左の耳の孔へあぶら虫に這ひ込まれた苦い体験から、夜ぶん耳の孔に栓をする習慣になりましたね。後で気がついたんですが、あの忌々しい大露西亞人どもは、あぶら虫の入つた玉菜汁シチイさへ食ふんですよ。実にど

うも、その時の気持といつたら、お話にも何にもなりませんでしたよ。耳の中がムツムツと擦つたくつて擦つたくつて……いやはや、癩癩玉が破裂しました！ だが、私どもの村の、何でもないとただの、さる老婆がすつかり癒して呉れましたよ。それがどうして癒したとお思ひになりますか？ ほんの呪ましなひ禁ひと言ですよ。医者どものことを、どうお考へになりますか、あなた？ 私の考へでは、彼奴らはただもう、我れ我れをごまかしたり、愚弄したりしをるだけなんで。何でもない老婆の方が、あんな医者どもよりは、二十倍も心得がありますよ。」

「いやまつたく、あなたのお言葉は至極御尤もです。どうかすると、その、実に……。」茲でイワン・フョードロキツチは、続け

て言ふべき適当な言葉が見出されないもののやうに口を嚙んでしまった。序でに、彼が概して口の軽い方ではなかつたことを申し添へておく必要がある。恐らくそれは例の弱気から来てゐるのだらう、が、或は又、もつと美しい言ひ現はし方をしようと思つたからかも知れない。

「ようく、乾草を振り捌くのだぞ！」と、グリゴーリイ・グリゴーリエツチは自分の従僕に對つて言つた。「この辺の乾草は實にひどいから、ひよつとすると、小枝などが混つてゐるかもしれないぞ。ぢやあ、あなた、お寝みなさいまし！ 明朝はもうお目にかかれますまい。私は夜明け前に出発いたしますからね。明日は土曜のことで、あなたの猶太人は安息日を守りませうから何も早

くお起きになることはありませんよ。どうか私のお願いをお忘れにならないで下さい。ホルトウイシチエへお出かけ下さらないと、ほんとに承知いたしませんよ。」

そこでグリゴリー・グリゴリーエヰツチの従僕が、主人のフロツクコートと長靴を脱がせて寝衣に著かへさせた。するとグリゴリー・グリゴリーエヰツチは、いきなり寢床の上へごろりと横になつたが、それは、まるで厩大な羽根蒲団がもう一つの羽根蒲団の上へ重なつたやうな恰好であつた。

「えい、小僧つ！ どこへ行くんだ、悪党！ ここへ来て、掛蒲団を直すんだ！ こら、やい、枕の下へ乾草を押し込めといつたら！ どうだ、もう馬には水を飲ませたか？ もつと乾草だ！

ここんとこへ、この脇腹の下へだ！ それから掛蒲団をよく直すんだ！ さうさう、もう少し！ あ、あーっ！……」

茲でグリゴリー・グリゴリーエツチは、もう二度ばかり溜息をつくつと、直ぐさま部屋ぢゆうに轟ろき渡るやうなおつそろしい躰をかき出したが、時々猛烈な鼻号を立てたものだから、寝棚に寝てゐた老婆が目を醒まして、不意にキョトキョトとあたりに目を配つたが、何事もないのを見ると、やれよかつたと安心して、再び睡りに落ちた。

翌朝、イワン・フョードロエツチが目覚めた時には、肥ふとつちよ大漢の地主の姿はもうなかつた。これが彼の道中で遭遇した、たつた一つの、目覚ましい出来事だつた。それから三日目には自分の所も

ちむら  
 有農園の間近に迫つてゐた。

やがて風車場が翼を振り振り見えはじめ、猶太人がその瘦馬を鞭打つて丘の上へ登るにつれて下の方に柳の並木が姿を現はした時、イワン・フョードロキツチは自分の胸が激しく鼓動しはじめのを感じた。柳の木の間からは池が生々として明るい光りを放ち、すがすがしい息吹を吐いてゐた。曾て彼はそこで水浴みづあびをした。またこの池の中を、腕白仲間といつしよに、頸まで水につかりながら、蝸蚪えびびを捜しまはつたこともある。幌馬車キビートカが堰の上へあがると、イワン・フョードロキツチの眼には、懐かしい茅葺きの古びた家や、いつか彼がこつそり登り登りした林檎や桜さくらんぼう、桃の樹が見えて来た。彼が邸内へ馬車を乗り入れると同時に、四方

八方から、茶、黒、鼠、斑等ぶちの種々雑多な毛色の犬の群れが駈け寄つた。中には吠え立てながら馬の脚もとへ飛びこんで来るものあり、また、車軸に脂の塗つてあるのを知つて、後ろへ どうです、見て下さい、何と私は立派な若者でせうが！ とでも言つてゐるやうだつた。汚れた襯衣シャツを著た腕白どもが物珍らしさうに駈けて来た。十六匹の仔豚をつれて庭を徘徊してゐた牝豚は、探るやうな顔つきで鼻づらを上へあげて、いつもより声高にゲゲエ唸つた。庭の地べたに、莖にひろげた小麦や稷や大麦が夥しく天日に乾してあつた。

イワン・フョードロキツチはひどく夢中になつて、さうしたも  
のに見惚れてゐたが、馭者台から降りたばかりの猶太人の腓ふくらはぎぶに斑

ちいぬ

犬が噛みついた時、はじめて我れに返つた。炊事婦と、下したば

働女たらきと、それから毛織の下ベチコート袴ハカマを穿いた二人の女中から成る

使用人の一隊が駈けよつて、あれまあ、お邸の旦那様だよ！

と、先づ一言おつたまげた声で叫んでから、叔母さんは女中のパラシユカと、それから、時には作男や夜番の役目まで引き上げる馭者のオメリコを連れて、畠へ麦を蒔きつけに行つてみると告げた。しかし、目ざとくも遠くから葎ごぎが掛けの幌馬車キビートカを見つけた叔母さんは、はやくも其処へ歸つて来てゐた。そしてイワン・フォードロキツチは彼女が殆んど彼を両の手で持ちあげるやうにしたので、びつくりして、これが自分の老衰と病弱を訴へてよこした、あの当の叔母かしらと怪しんだ。

## 三 叔母

叔母のワシリーサ・カシユパーロヴナは、当時五十歳前後であった。彼女は一度も良人を持つたことがなく、いつも、未婚の生活が自分にとつては何より大切だといふことを口癖にしてゐた。だが、私の憶えてゐるかぎりでは、彼女を嫁に世話しようとする者が一人もなかつたのだ。それは、男といふ男がみな、彼女の前へ出ると、妙に気おくれがして、彼女を口説くだけの勇気が出なかつたことに起因してゐる。とても、ワシリーサ・カシユパーロヴナの気性にはかなはん！ さう未婚の男たちは言ふのだつた

が、それは至極尤もなことであつた。ワシリーサ・カシユパーロ  
 ヴナにかかつては、誰彼なしに、青菜に塩も同様だつたから。全  
 くどうにも始末におへない酔つぱらひの粉屋の大將を、彼女は、  
 男のやうなその手で、彼の房チュリーブ髪をひつ掴んで毎日々々引つぱり  
 まはしたといふだけで、ほかにどういふ手段を用ゐたでもなしに、  
 その男をば、人間といふよりは寧ろ黄金そのものでも言ふべき  
 優秀な人物に創りかへてしまつたものだ。彼女の背長せたけはほとんど  
 巨人のやうで、またそれに全くふさはしい肉つきと腕力とをそな  
 へてゐた。天が彼女に、ふだんは焦茶いろの細かい襪ひだをとつた婦カ  
 人服ポトを身に著け、復活祭と自分の命名日なづけびには赤いカシミヤのシヨ  
 ールを纏ふやうに運命づけたのは、大きなあやまりであつた。彼

女にはむしろ、竜騎兵式の口髭と、長い騎兵靴とが何よりもふさはしかつたのだ。そのかはり、彼女のすることなすことは、一々その外貌にまつたく似つかはしく、舟を漕がせれば、どんな獵師もかなはないくらゐ巧みに櫂をあやつるし、野禽とりも射てば、草刈人夫も嚴重に見張る。瓜畠の甜瓜の数は一つのこらず憶えてゐる。うちの堰堤つつみの上をとほる荷馬車からは五哥カベイカづつの通行税を取る。木登りをして梨を揺り落す。油を売る懶け者の奉公人を、その怖ろしい手で打擲もするが、よく働らく者には、やはり同じいかつい手でウオツカを一杯もつて来てやる。彼女はほとんど同時に、小言もいへば絲も染める、台所へも飛んでゆく、濁麦酒クワスを拵らへる、蜂蜜のジャムを煮るで、まる一日ぢゆうかけ　つて、何処ひ

とところとして顔出しをせぬ処がない。その結果、イワン・フョードロキツチの、この小さな所有農園もちむらは、最近の人口調査によれば十八人の農奴から成り立つてゐたが、まつたく文字どほりに繁榮してゐた。そのうへ、かの女は熱烈に甥を愛するのあまり、彼のために營々辛苦して、零碎な金まで貯蓄してゐた。

故郷へ帰ると同時にイワン・フョードロキツチの生活はがらりと一変して、それまでとは全く別個の軌道をとつて進んだ。恰かも彼は生まれながらにして十八人の農奴の村を監理するためにつくられてゐるかの觀があつた。当の叔母も、まだ家政の全般に亘つては彼に手出をさせなかつたけれど、ゆくゆくはこの甥が申し分のない一家の主人あるじになるに違ひないと信じてゐた。 あれは、

まだまだ若い小僧つ子だもの！ と、彼女はイワン・フョードロ  
キツチがもう四十の声をきくのに間もない歳であつたにも拘らず、  
いつも、かう言ひ言ひした—— 何ひとつ、あれにわかつてゐる  
ものか！

だが、彼はいつも欠かさず、麦刈の人夫について野良へも出た。  
それがまた、彼の温良な魂に何ともいへぬ歡びを与へた。十挺か  
ら、それ以上もの、ピカピカ光る大鎌の一致した動き、整然と列  
になつて倒れる草の音、或は友に逢へるが如く喜ばしげに、或は  
別離の如く悲しげに、相間々々に歌ひ出される刈手の唄、静かな  
明朗な夕べ——それがまた、何といふ夕べだらう！ 何と奔放で、  
すがすがしい大気だらう！ その時、万ものみな象がよみがへる。曠野

は赤みを帯び、青みを帯び、様々の色に照り映える。鶉や、鶉のがんや、

鶉や、さては、きりぎりす 蠡 蜥など無数の虫どもが、とりどりの声をあげて

鳴き出し、はからずも渾然たる合奏をなして、何れもが東の間も休まうとしない。陽は落ちて地平の彼方に隠れる。おお！

その爽やかさ、快よさ！ 野良には、此処かしこに焚火の火が燃

え、鍋がかけられて、それをとりかこんで髭もじやの刈手どもが

坐つてゐる。水すゐとん 団の湯気が漂ふ。たそがれの色は灰いろを帯び

て来る……。さうした折、イワン・フョードロヰツチが、どんな

好い気持になつたかは、口では言ひ表はすことも難かしいくらゐ

だ。彼は刈手たちの仲間いりをして大好物の水団を賞味するもの

忘れて、じつとひとつ処に立ちつくしたまま、空の彼方に消えゆ

く鷗を見おくつたり、野良につらなる、刈り取られた麦の堆積やまを数へたりしてゐるのであつた。

程なく、イワン・フォードロキツチは、到るところで偉い旦那だと取り沙汰されるやうになつた。叔母さんは自分の甥が自慢で自慢で堪らず、何かといへば彼のことを吹聴せずにはゐなかつた。或る日——それは、もう収穫とりのいれの終りころで、たしか七月の末のことだつた——ワシリーサ・カシユパーロヴナは、さもおほぎやうな顔つきで、イワン・フォードロキツチの手を執りながら、もう永いあひだ気がかりになつてゐた或る用件について、今、相談がしたいと言つた。

「な、イワン・フォードロキツチ、」さう彼女はきり出した。

「知つてのとほり、お前さんの農園は十八人の農奴むらだけれど、それは人口調査の上のことで、実際はもつとずつと多くなつて、多分、二十四人には殖えてゐる筈だよ。でもそのことではありません。お前さん、あの、うちの耕地の彼方むかふにある森を知つておいでだらう。そしてその森のむかふの、広い草地もおほかたは知つておいでだらう。あの草地は二十町歩足らずだが、草を毎年、百留ルーブリ以上には売ることが出来るのだよ。噂のやうに騎兵聯隊がガデアーチに置かれることにでもなれば、もつともつともなるだらうよ。」

「ええ、それあ知つてゐますとも、叔母さん、とても素晴らしい、好い草ですよ。」

「その、草がとても好いつてことは妾だつて知つてゐますよ。でもお前さん、あの地所がみんな、事実上お前さんのものだつてことは御存じかえ？ 何だつてそんなに眼を丸くしたりなどするのです？ まあ、お聴き、イワン・フォードロヰツチ！ お前さんはあの、ステパン・クジミツチを憶えておいでかえ？ まあ、妾としたことが、憶えておいでかもないもんだ！ お前さんはまだ、その頃は、あの人の名前もよう言はんくらゐ小さかつたんだもの。どうして憶えてなどあるものか！ さうさう、ファイリツポフキ\*降世齋節にはいる前の精進落に、妾がこちらへ来て、お前さんを抱きあげた時だつたよ、お前さんといつたら、すんでのことに妾の一帳羅を台なしにしてしまふ処だつたよ。でも好い塩梅にお前さんのお母さ

んのマトリョーナが抱き取つて呉れたので助かつたけれど。そんな、お前さんは穢ならしい赤ん坊だつたのさ！……だが、そんなことはどうでも好い。で、うちの村の地続きの土地はみんなあのホルトウイシチエ村とひとくるめに、あのステパン・クジミツチの持物だつたんだよ。ところでお前さんに話さねばならないことは、そのステパン・クジミツチが、まだお前さんの生まれない前から、お前さんのお母さんのとこへちよくちよく通つたもので——尤もお前さんのお父さんの留守の時に限つてだよ。でも妾はそのことであのひと彼女を咎めだてする気は更々ありません、——どうか後生安楽に成仏して貰ひ度いもんだ——あのひと彼女は始終、この妾に不実な仕打ばかりしたものだけれど、しかし、そんなことはどう

だつていいが、兎も角、あのステパン・クジミツチが、今も妾がお前さんに話した、あの地所をお前さんに譲るといふ遺言をしたんだよ。ところが亡くなつたお前さんのお母さんといふ女ひとは、まあ此処だけの話だけれど、とても変人でね。悪魔に（神様、どうぞこの穢らはしい言葉をお赦し下さい！）だつて彼あのひと女の気心は分りやしない。どこへ、一体、その証文を隠してしまつたものか——それは神様より他には、誰にも分りつこないのさ。だが、これはてつきりあのグリゴリー・グリゴリエヰツチ・ストルチエンコといふ、独身の古狸の手に握り潰されてゐるのに違ひないと、妾は睨んでゐます。あの太鼓腹の曲者が、遺産をすつかり横領してしまつたのだよ。あの男がその証文を隠してゐなかつたら、

何だつて賭けますよ。」

フリッツポフキ  
降世齋節

降誕祭前の精進期、十一月十五日より十二

月二十五日（旧露曆）まで。

「叔母さん、それは僕が宿場で知合ひになつた、あのストルチエ  
ンコぢやありませんか？」さう言つて、イワン・フョードロキツ  
チは、自分の遭遇した一部始終を物語つた。

「それあ、あの人のことはよくは知らないよ！」と、少し考へて  
から叔母さんが答へた。「ひよつとしたら、そんなに悪い人間で  
はないのかもしれない。実際、あの人がこちらへ引移つて来てから、  
まだ半年にしかならないのだから、そんな僅かひまの間に人柄を知る  
つてことは出来るものぢやないからね。何でも、あの人のお袋さ

んだといふお婆さんは、大層賢い女だつてことだよ。人の話では胡瓜漬の名人ださうだ。それに、あすこのうちの女中は大変上手に段通を織るつてことだよ。で、お前さんの言ふやうに、あの人がそんなにちやほやするんだつたら、ひとつ出かけてみて御覧よ。ひよつとしたら古い罪とかにん人も良心に立ち返つて、もともと自分のでもない物は返してよこすかもしれないから。多分、半蓋馬車ブリーチカに乗つて行けるだらうが、忌々しいことに腕白どもが後から後から釘を抜き取つてしまつたから、オメリコにさう言つて、よく革を打ちつけませんことには。」

「なあに、叔母さん。僕は叔母さんが鳥を射ちに行くとき乗つておいでになる、あの馬車でいきますよ。」

かういふことで、この話には鼻がついた。

#### 四 午餐

イワン・フォードロキツチがホルトウイシチエ村へ乗り込んだのは、ちやうど午餐時ひるめしどきであつたが、地主の邸が間近になると彼は少しおぢけづいて来た。その家は間口が馬鹿に広くて、近所界限の地主の家のやうに茅葺ではなく、板葺屋根であつた。邸内にある二棟の倉庫も同様に板葺で、門は檜材で出来てゐた。イワン・フォードロキツチは、ちやうど、舞踏会に乗りつけた洒落者が、どちらを見ても自分より優れた服装をした客ばかりなのに、聊か

めんくら  
面喰つたといった形だつた。彼は敬意を表して倉の脇で馬車を  
停めると、そこからは歩いて玄関にかかつた。

「あつ、イワン・フォードロキツチだ！」と、庭を歩いてゐたグ  
リゴーリイ・グリゴリエキツチが喚き出した。彼はフロツクを  
著てゐたが、ネクタイもチョツキもズボン釣りもつけてゐなかつ  
た。それでも彼の肥つたからだには余程その服装がこたへるらし  
く、顔からは汗が玉をなして流れてゐた。

「どうなすつたんです。あなたは叔母さんに一と目会つておいて  
すぐ様こちらへいらして下さるといふお約束でしたのに、どうし  
て今日までおいでにならなかつたんです？」かうした言葉に次い  
でイワン・フォードロキツチの唇は、例のお馴染の座クッション褥クッションに出

会つた。

「どうも家事に追はれ勝ちでして……。今日はほんのちよつとお邪魔に上りました、実は少しその……。」

「ほんのちよつとですつて？ そんなことは言はせませんよ。おい小僧つ！」さう肥つた主人が呶鳴ると、哥薩克風の長上衣をきた、いつかの少年が台所から駈け出して来た。「早くカシヤンにさう言つて門を閉めさせてしまへ——分つたか！ しつかり閉め切つてしまへつて！ そして早速この旦那の馬を軛くびきから外すんだ。さあ、どうか中へお入り下さい、此処ではとても暑くて、私の襯衣はもう、ぐつしよりなんです。」

イワン・フョードロキツチは部屋へ通ると、もちまへの小胆に

も拘らず、無駄に時間をつひやすことなく、てきぱき事を運ぼうと、肚を決めた。

「叔母がその……私に申しますには、何でも亡くなられたステパン・クジミツチの御遺言書とかが、その……。」

この言葉にグリゴリー・グリゴリエツチのただつ広い顔がどんな不愉快な表情を現はしたかは、ちよつと形容に困るくらいである。

「いや、とんと仰つしやることがよく聴えませんよ！」と、彼は答へた。「お断わりしておかなければなりません、私の左の耳へあぶら虫が這入りましてね、（あの碌でなしの大露西亞の髯もぢや先生たちと来たら、もう、家ん中ぢゆう、あぶら虫でうじや

うじやさせてをりますからね）その気持の悪さ加減といつたら、とても筆紙に尽すことは出来ません。いやどうも、擦つたくつて擦つたくつて。しかし、さる老婆がごく簡単な方法で癒してくれましたよ……。」

「私がお話をいたしたいと思ひますのは……。」と、イワン・フョードロヰツチはグリゴリー・グリゴリエヰツチがわざと余所事に言ひ紛らさうとするのを見て、思ひ切つてそれを遮ぎつた。

「ステパン・クジミツチの遺言の中に、その何です、贈与契約書とかがあつて……それが、この私に……。」

「いや分りました、叔母さんがあなたにそれを吹き込まれたのですね。それはまつたく根も葉もないことです！ 伯父はどんな贈

与契約もしてませんでしたよ。尤も遺言の中に何かの証文のことは書いてありましたが、いつたいそれは何処にあるのです？ 誰ひとりそれを提出しなかつたのです。かう申し上げるのも、眞実あなたのお為めを思ふからですよ。誓つてそれは、根も葉もないことですよ！」

イワン・フョードロキツチは、ひよつとしたら、実は叔母がそんな風に邪推をしたに過ぎないのかもしれないと思つて、口をつぐんだ。

「おや、母が妹たちといつしよにこちらへ参るやうですよ！」と、グリゴリーイ・グリゴリーエキツチが言つた。「てつきり午餐の用意が出来たのです。さあ参りませう！」

そこで彼はイワン・フョードロキツチの手を執つて一室へ招じ入れた。そこにはウオツカの罫と ザークスカ 前菜の載つた卓子があつた。丁度その時、まるきり珈琲沸しに頭巾をかぶせたやうな、背の低い老婆が二人の令嬢——一人は ブロンド 金髪で一人は ブリュネット 栗色髪の——と一緒に入つて来た。イワン・フョードロキツチは物馴れた騎士 ナイト のやうに、先づ最初に老婆の手に、次ぎに二人の令嬢の手に接吻した。

「お母さん、この方はお隣り村のイワン・フョードロキツチ・シユポーニカさんですよ！」とグリゴリー・グリゴリエキツチが紹介した。

老婆はじつとイワン・フョードロキツチの顔を眺めた。或は、

ただ眺めたやうに見えただけかもしれない。しかし、それはほん  
とに人の好きさうな顔つきで、あだかも、イワン・フョードロ  
ツチにあなたは冬の用意に胡瓜をどれほどお漬けになりますか  
？ と訊いてでもゐるやうに思はれた。

「ウオツカは召上りましたかの？」と、老婆が訊ねた。

「お母さん、あなたはきつと寝惚けていらつしやるんですね。」  
と、グリゴリー・グリゴリエキツチが言つた。「お客さんに  
対つてウオツカを召上つたかなどとおたづねする人があるもんで  
すか？ あなたはおとりもちをして下さりさへすればいいんです。  
ウオツカを飲む飲まないはこつちのことです。イワン・フョード  
ロキツチ！ どうぞ、ウオツカは矢車菊を浸けたのにしませうか、

それとも、\*トウロヒーモフのにしませうか？ どちらをお好みですか？ おや、イワン・イワーノヰツチ、君はまた何だつて、そんな処に突つ立つてゐるんだね？」と、グリゴリー・グリゴリーエヰツチは後ろを振り返りながら声を掛けた。イワン・フォードロヰツチがそちらを見ると、イワン・イワーノヰツチはウオツカの方へ近づかうとしてゐるところだつた。その人は裾の長いフロツクを著て、巨大な立衿の中へ頤をすつかり埋めてゐたので、その首はまるで馬車にでも乗つたやうに、衿の中に坐つてゐた。

トウロフイーモフ 当時の火酒醸造所の名前。

イワン・イワーノヰツチはウオツカの傍へ近寄ると、先づ手を拭いて、さかづきを仔細に検査してから酒を注いで、ちよつと明

りにすかして見て、一度にそのさかづきのウオツカを口の中へ流し込んだが、直ぐにはそれをのみくださないで、口中をよく洗ふやうにしてから、ゴクリと飲みくだして、平茸の塩漬を添へた麴で口直しをしてから、イワン・フォードロキツチの方へ向き直つた。

「いや、失礼ですが、あなた様はイワン・フォードロキツチではいらつしやいませんか、あのシュポーニカさんでは？」

「仰せの通りです。」と、イワン・フォードロキツチが答へた。

「いやどうも、私が存じあげてゐた頃のあなたとは実にえらいお変わり方で、いや実にどうも！」さう言つて、イワン・イワーノキツチはなほも言葉をつづけた。「私はあなたがこんなくらゐでい

らつしやつた頃のことを、よく存じてをりますよ！」さう言ひながら、彼は掌を床から二尺あまりの高さに上げて見せた。「お亡くなりになりました御尊父は——どうぞあの方に天国の恵みがありまするやうに！——実に稀に見る御仁でした。あの方のおつくりになるやうな西瓜や甜瓜は、たうてい今時、どこを捜し　つても見つかりつこないほどの逸物でしたつけ。けふもこの家で、」  
 と、彼はイワン・フョードロキツチを傍へ引つぱつて行つて耳こすりをした。「屹度あなたに甜瓜をすすめますがね——それが、いやはや、どんな甜瓜でせう？　見るのも嫌になりますよ！　ところで、どうでせう、御尊父のおつくりになつた西瓜と来たら、」  
 さう言ひながら彼は莊重な顔つきをして、大木の幹でも抱へるや

うに両腕を拵げた。「慥かにこれ位はありましたよ！」

「どうぞ食卓<sup>テーブル</sup>にお就きになつて下さい！」と、グリゴリー・グリゴリーエキツチがイワン・フョードロキツチの手を執つて言つた。

グリゴリー・グリゴリーエキツチは、いつも自分の坐る食卓の一端に、恐ろしく大きなナフキンを胸に捲きつけて、席についた。その恰好が、まるで理髪店<sup>とこや</sup>の絵看板によくある図そつくりであつた。イワン・フョードロキツチは顔を赧らめながら、指定された席に、二人の令嬢と差し向ひに坐つた。イワン・イワーノキツチはすかさず彼の隣りに陣取つて、内心、自分の博識を見せびらかす相手の出来たことを悦んだ。

「おや、イワン・フョードロキツチ、あなたはそんな尾クレーブリック部部な  
 んぞお取りになつて！ これは七面鳥でございますよ！」と老婆  
 は、イワン・フョードロキツチの前へ、黒い補衣つぎの当つた鼠いろ  
 の燕尾服を著た土臭い給仕が、料理の載つた皿を差し出した時、  
 その方へ振り向いて言つた。「どうぞ背スピンカ肉をお取り下さいませ  
 ！」

「お母さん！ 誰もあなたに余計な世話を焼いて下さいと頼みや  
 しませんよ！」と、グリゴリー・グリゴリーエキツチが咎めた。  
 「お客様は何処を取つたらいいか、ちゃんとお心得になつてをり  
 ますよ！ イワン・フョードロキツチ！ 翼クルイリシコ部部をお取り下さ  
 い。いや、そちらのを胎子はらこといつしよに！ どうして又あなたは

それつぱかしお取りになつたんで？　股ももに肉をお取り下さい！

こら、何だつて貴様は皿を持つたままぼんやり口を開けてるのだ

！　おすすめしろ、悪党、膝をついて！　疾く申し上げるんだ、

イワン・フョードロキツチ、どうぞ股肉をお取り下さいまし

つて！」

「イワン・フョードロキツチ、どうぞ股肉をお取り下さいまし！」

さう、膝まづいて皿を捧げたまま、給仕が言つた。

「ふん、これが七面鳥か！」と、蔑むやうな顔つきでイワン・イ

ワンノキツチが、自分の隣人を顧みながら、小声で言つた。「こ

れが七面鳥でなければならんものでせうかね？　ほんとに、手前

どもの七面鳥を御覧に入りたいもんで！　まつたくの話が、一羽

でこんなの十羽分以上は脂肪あぶらがのつてゐますよ。ほんとになさ  
らないかも知れませんが、そいつらが宅の庭を歩いてゐるのを見  
ますと、まつたく気味が悪いくらゐる——それほど脂肪あぶらがのつてゐ  
るのですよ!……」

「嘘を吐つき給へ、イワン・イワーノヰツチ!」その話を小耳には  
さんで、グリゴリー・グリゴリーエヰツチが口を入れた。

「お話いたしますが」と、イワン・イワーノヰツチはまるでグリ  
ゴリー・グリゴリーエヰツチの言葉が聞えなかつたやうな振り  
をしながら、自分の隣人に同じ調子で語りつづけた。「去年、私  
が七面鳥をガデヤーチへ持つて行きましたところ、一羽五十哥づ  
つで引き取ると申しましたが、それでも売るのが惜しかつたくら

「みですよ。」

「イワン・イワーノキツチ！ 君は、出鱈目を言ってるんだといったら！」グリゴリー・グリゴリエキツチは、一層はつきり聞えるやうに、一語々々句切つて声を張りあげた。

しかし、イワン・イワーノキツチは、まるで自分には関係のないことのやうな振りをしながら、同じ調子で言葉をつづけたが、それでも余ほど声を落して、「実際、惜しいと思ひましたよ、あなた。ガデヤーチ郡の地主のうち一人だつて……。」

「イワン・イワーノキツチ！ 君は馬鹿だよ、それつきりのことさ。」と、グリゴリー・グリゴリエキツチは大声に呶鳴つた。「イワン・フョードロキツチは、そんなこたあ何もかも、君より

良く御存じなんで、君の法螺なんか信用されるもんか。」

茲でイワン・イワーノキツチはすっかり機嫌を損じて口をつぐみ、見るのも気味が悪いといふほどには脂肪あぶらののつてゐない、眼の前の七面鳥を平げにかかつた。

ナイフやスプーンや皿の音が、暫らくの間は談話に取つて代つたが、グリゴリー・グリゴリエキツチが仔羊の骨の髓をしやる音が何よりも騒々しかつた。

「時に、あれをお読みになりましたですか？」と、暫らくの間だまつてゐてから、例の馬車のやうな立衿からイワン・フォードロキツチの方へ首を差し出しながら、イワン・イワーノキツチが訊ねた。「あの＊コロベイニコフの聖地巡礼記 といふ書物を？」

実にどうも、素晴らしく面白い本ですなあ！ 今時あした書物はからつきし出ませんね。あれは何年の出版だったか、つい見落したのが残念ですよ。」

コロベイニコフ 初め莫斯科の商人であつたが、一五八二年ヨハン四世（雷帝イワン）の命により、父帝の手にかかつて薨じたイワン皇子の冥福祈願のため、聖地アソスの山へ行き、一度帰国してから再び聖地巡拝に赴き、パレスティナから基督の靈柩模型を莫斯科へ携へ帰つた（一五九三年）。彼の著書といはれる、浩瀚な『聖地巡礼記』は、露西亞の宗教界に於て非常に有名なものであつた。

イワン・フョードロキツチは書物の話が出たなどと思ふと、てれかくしに、せつせとソースを自分の皿へよそひ始めた。

「実に驚ろくべきではありませんか、下賤な町人の身を以つて聖地を残らず巡つたのですからね。実に三千露里以上ですよ！ 三千露里以上！ 彼がパレスチナやエルサレムに行くことが出来たのは、一に上帝の御恵みに他なりません。」

「では、何ですか、その人は、」と、エルサレムのことを、よく従卒から聞かされてゐたイワン・フョードロキツチが言つた。

「その、エルサレムへも行つたとおつしやるので？」

「何のお話ですか、イワン・フョードロキツチ？」と、食卓の端からグリゴリイ・グリゴリエキツチが口を挿んだ。

「私は、つまり、その、なんです、実にどうも、そんな遠い国々がこの世にあるのかと、さう申しただけなんです！」と、イワン・フョードロキツチが言つた。彼はこんなに長い、むつかしい文句を一気に言つてしまつたことに心から満足してゐた。

「その男の言ふことなんぞ真まに受けてはいけませんよ、イワン・フョードロキツチ！」と、碌に相手のいふことも聴かないで、グリゴリー・グリゴリーエキツチが言つた。「みんな、口から出まかせですよ！」

さうかうするうちに午餐は終つた。グリゴリー・グリゴリーエキツチは、いつもの習ならはし慣で少し横になるために自室へ引きさがつた。で、お客は老主婦と二人の令嬢の案内で客間へ移つた。

その部屋の卓子の上には、さつきウオツカを残しておいて食事に赴いた筈であつたのに、何かのからくりみたいに、今はそれにかはつて、あらゆる種類のジャムの皿や、西瓜だの、桜ん坊だの、胡瓜だのを鉢に盛つたのが、処せまくならべてあつた。

万事にグリゴリー・グリゴリーエヰツチのゐないことが目立つた。老主婦の口は一段と軽くなつて、誰も頼みもしないのに、自ら進んで、\*パステーラや乾梨の搾らへ方の秘訣をいろいろ打明けた。令嬢たちも談話の仲間いりをしたが、しかし二十五歳ぐらゐに見える姉娘より六つばかりも年下らしい、金髪の妹娘の方は沈黙がちであつた。

パステーラ 果実や漿果を砂糖蜜で煮とかし、型に入れ

て半ば固めたもの。

だが、イワン・イワーノヰツチが誰よりもよく話したり、動きまはつたりした。今や誰も自分を貶したり混ぜつかへしたりする者のないことを確信した彼は、胡瓜に就いて論じたり、馬鈴薯の植ゑ方を説いたり、また昔は実に賢い人々があつた——たうてい今時の連中とは同日に談ずべくもない！——などと言ふかと思へば、日進月歩の勢ひでますます人智が進んで、実に巧妙極まる物が発明されるなどと感嘆する。一口に言へば、彼は心を浮き立たせるやうな雑談が何よりも好きで、しまひにはただ口へのぼすことの出来る限り矢鱈にしやべり散らすといった類ひの人物であつた。話が嚴肅敬虔な問題に触れる時には、イワン・イワーノヰツ

チは一語々々の後で頷いては溜息をつくのだった。農作上のこととなると、例の馬車のやうな立衿から首をぬつともたげて、一と目みれば、梨入りの濁麦酒クワスはどうして造るべきか、甜瓜がどの位に大きいか、庭を駈けまはる驚鳥がどんなにふとつてゐるかが、直ちに読み取られるやうな顔つきをして見せた。

もう日暮になつてから、やつと、イワン・フョードロキツチは暇を告げることが出来た。もちまへのおとなしきにも似ず、泊つて行けと言つて、たつて引き止められたにも拘らず、彼は帰らうといふ初一念を貫いて、つひに帰途についたのであつた。

## 五 叔母の新らしい計画

「さあ、どうだつたえ？ あふるだぬきの老悪党の手から、首尾よく証文を引き出すことが出来たかえ？」と、イワン・フォードロキツチの顔を見ると同時に、叔母さんはいきなりかう訊ねた。彼女は辛抱がしきれずに、もう幾時間も前から玄関へ出て甥の帰りを待ちあぐねてゐたが、たうとう我慢がなくなつて、門前まで飛び出してきてゐたのだ。

「いいえ、それがねえ、叔母さん、」と、馬車を降りながらイワン・フォードロキツチは答へた。「グリゴリー・グリゴリエキツチの手許には、そんな証文は無いのださうですよ！」

「それをお前さんは真に受けて来たのかえ？ 嘘を吐いてるんだ

よ。あの碌でなしめ！ いつか今度出会つたら、ほんとに、この手でひつぱたいて呉れるのに、ううん、屹度あいつの脂肪あぶらを絞つてやるよ！ しかし、それより裁判にかけてでも取り戻せるものかどうか、ひとつ裁判所の書記に訊ねて見なくつちやあ……。だが、それは又その時のことだが、どうだつたえ、午餐おひるには御馳走があつたかえ？」

「素晴らしく……いや大したものでしたよ、叔母さん！」

「へえ、それでどんな料理が出たといふのだえ？ 一つ話してくれ、何でもあすこのお婆さんと来ては、台所の監督の名人だつてことだから。」

「スメターナ酸乳皮入りのスカールニキ酸乳煎餅が出ましたよ、叔母さん。それから詰

め物をした鳩をソースに浸けたののだの……。」

「梅を詰めた七面鳥は出なかつたかえ？」と、その料理にかけては自分が非常な名人であつただけに、叔母さんはさういつて訊ねたものだ。

「七面鳥も出ました！……それよりも、たいへん美しいお嬢さんがありましたよ——グリゴリー・グリゴリエキツチの妹さんたちですが、中でも金髪の娘さんがきれいでした！」

「おや、おや！」さういつて叔母さんは、イワン・フョードロキツチの顔をまじまじと見まもつた。イワン・フョードロキツチはまつ赤になつて眼を伏せた。新らしい考へが忽ち叔母さんの頭に閃めいた。「さあ、それでどうしたといふのだえ？」と、彼女は

好奇心に駆られながら、まくし立てるやうに訊ねた。「いつたい、その娘の眉はどんなだつたえ？」この叔母さんが女の美しさを口にする時には、いつも先づ眉のよしあしを第一にいふのが常であつたことを申し添へておく必要がある。

「その眉がですよ、叔母さん、あなたが常々お話になる、その、叔母さんのお若い頃の眉にそっくりなんですよ。そして顔ぢゆうに細かい雀斑そばかすがあるんです。」

「おや、さうかえ！」と、別段お世辞にいつた心算つもりでもなかつたイワン・フョードロヰツチの、その註釈に満足して叔母さんが語をついだ。「それで、着物はどんなのを著てゐたえ？ それあね、何といつたつて今時この妾の部屋着カポートのやうな丈夫な布きれは、なかなか

か見つけようたつて見つかるものぢやないけれどさ。それは兎も角、お前さんはその娘に、その、何か、お話をおしだつたかえ？」

「と仰つしやるとつまり、何ですか……僕がその、ねえ叔母さん？ その、ひよつと叔母さんは、もうそんな風に……。」

「何がどうしたとお言ひなんだえ？ 別に不思議なことがあるものか？ それが神様のお思召なのさ！ 若しかしたらお前さんとその娘とは、前の世さきから一緒にいるやうに定まつてゐたのかもしれないよ。」

「何だつて叔母さんはそんな風に仰つしやるのか、とんと僕には分かりませんよ。それが、この僕といふものをちつとも御存じない証拠ですよ……。」

「そうら、もう腹を立ててるんだよ！」と、叔母さんは言つた。

ほんとにまだ、からつきしのねんねえだ！ と、彼女は心の中

で呟やいた。 何にも知らないんだよ！ これは一つ、ふたり兩人をい

つしよにしてやらなきやならん。先づ第一に馴染みにしてやらなくつちやあ！

茲で叔母さんは、イワン・フョードロキツチを一人のこして置いて、台所を覗きに立つて行つた。

だがこの時以来、彼女はひたすら一日も早く甥に妻帯させて、初孫の守をしたいものだ、ただ一途づにそのことばかり考へるやうになつた。彼女の頭には、あれやこれやと、ただ婚礼の支度のことばかりが折り重なり、目立つて何彼の用事に前よりも一層せ

はしなく駈けまはるやうになつた。とはいへ、さうしたことが好都合に運ぶどころか、却つて、悪結果を来すばかりであつた。時々麵麩菓子ピロジユノエを（彼女は大抵それを料理女に委せておかなかつた）拵らへながら、彼女は我れを忘れて、傍に小さい孫が菓子をねだつてゐるやうに空想して、うっかり美味おいしさうな処をちぎつてはさし出すのであつた。ところがその都度、番犬が得たり賢しとその美味おいしい麵麩菓子をぱつくりくはへては、ガツガツ言ひながら食つてしまふので、その物音に初めて我れに返つた叔母さんはいつも火搔棒で犬を打つたものだ。そのうへに叔母さんは、自分の大好きな慰みを止めてしまつて、狩かりにも出かけなくなつた。稀たまに出かけることがあつても、鷓鴣と間違へて鳥を射つたりした。そん

なことは、前にはつひぞなかつたことである。

それから四日ばかり経つと、納屋から半蓋馬車ブリーチカが庭へ曳き出さ

れた。馭者のオメリコ——彼は時には作男であり、時には夜番

でもあつた——が、朝早くから鉄かなづち槌でカンカンと革を打ちつけ

ながら、あとからあとから車輪の脂を舐めに來る犬どもを引つき

りなしに追ひ立てた。それは正しく、かのアダムが乗用した半蓋ブリ

馬車イチカそのものであつたことを読者に予め御披露しておく必要があ

る。で、万一、誰かが、アダムの用ゐた馬車イチカが他にあるやうなこ

とを言つても、それは真赤な嘘で、てつきりその馬車は偽物でな

ければならぬ。茲に全く不可解な一事は、この馬車イチカがノアの洪水

からどうして助かつたかといふことであるが、恐らくノアの箱船

には、特別な置場があつたものに違ひない。この半蓋馬車ブリーチカの恰好を如実に読者諸子に描写して御覧に入れることの出来ないのは甚だ残念である。言ふまでもなく、ワシリールサ・カシユパーロヴナにはこの馬車の構造が非常に気に入つてゐて、いつもこの旧式な馬車が流行遅れとして葬り去られることを口惜しがつた。この半蓋馬車ブリーチカの形は少し傾いてゐて、右側が左側より余ほど高かつたが、それがまた彼女にひどく気に入つてゐた。といふのは、彼女の言ひ草では、一方からは背長せたくの小柄な人が、他方からは大柄な人が乗るのに都合が好いといふのであつた。然もその馬車の内部と来ては、小柄な人なら五人、この叔母さんのやうな大柄な人でも三人は、裕に坐ることが出来た。

ひる  
 正午ころ、一通り馬車の手入れが終ると、オメリコは厩から、  
 プリーチカ半蓋馬車よりは幾らか年齢としはの若い三頭の馬を曳き出して、その偉  
 大なる馬車に繋いだ。イワン・フョードロキツチが左側から、叔  
 母さんが右側からそれに乗りに込むと、馬車は動き出した。途中で  
 出会った百姓どもは、この立派な馬車を見ると、（叔母さんは滅  
 多にこの馬車で出かけなかつたので）恭々しく立ち停つては、帽  
 子を脱いで最敬礼をした。

二時間ばかりの後、馬車が玄関さきに停つた——いふまでもな  
 くストルチエンコ家の玄関さきである。グリゴリー・グリゴー  
 リエキツチは不在だつた。老婆が二人の令嬢と共に客を食堂へ迎  
 へ入れた。叔母さんはさつさと大股に進み寄るなり、非常に素早

く片方の足をにゆつと前へ踏み出して、声高らかに次ぎのやうな挨拶をのべた。

「奥様、かうして直々お目通りをして御機嫌を伺ふことの出来ましたのを何より喜ばしく存じます。それに、先だつてはまた、甥めが、お手厚い御歓待に預りまして、有難うございました。イワン・フョードロキツチはそれを大変自慢に致してをります。時に、奥様のお宅の蕎麦の出来栄は大層お見事でございますこと——こちらへ上ります道すがら拝見いたして参りましたよ。いつたい一町歩から束そくにしてどの位お収穫とりになりますか、ひとつ承はり度う存じますが。」

この挨拶に次いで、先づ一同の接吻が交はされた。客間に通つ

てから、老主婦は初めて口を切つた。

「蕎麦のことはいつかうに存じませんので。さういふことはグリー・グリー・グリ・グリーエツチに委せきりでございます、もう妾は疾とからその方とのことには手出しをいたしません。それに出来もしないのですよ、もうこの年と齡でございますから！ 宅の蕎麦は以前は帯の辺までもございましたものですが、今時のことはどうですか、分つたものではありませんよ。尤も何によらず当節は良くなつた良くなつたと申してをるやうでございますけれど。」

ここで老婆は溜息を一つついたが、誰か第三者がそこに居合はせたら、この溜息の中に古い十八世紀の吐息を感得したことだらう。

「お宅様の女中さん方はまた、大層上手に段通をお織りだといふお話を承はつてをりますが。」と、ワシリーサ・カシユパロヴナが言つた。それが老婆の最も感じ易い神経を刺戟して、この言葉に依つて、まるで蘇つたやうに元氣づいた彼女は、ひとへいと単糸の染色から、よりのと撚糸の準備に至るまで、こと細かに物語つた。

談話は忽ち段通のことから胡瓜漬や乾梨のことに移つた。一言にしていへば、一時間と経たぬ間に、この二人の老婦人は、百年も前から懇意な仲であつたかの如く、盛んに話し込んでゐたのである。やがてワシリーサ・カシユパロヴナは妙にひそひそと、小声でばかり話し出したので、イワン・フョードロキツチは何ひとこと聞き取ることが出来なかつた。

「それでは一つお目にかきませうかな？」さう言つて、老主婦は立ちあがつた。

それに次いで令嬢たちとワシリーサ・カシユパロヴナが座を立つた。そして一同は女中部屋をさしてぞろぞろと歩き出した。だが、叔母さんはイワン・フョードロヰツチに、後に残るやうにと目くばせをして、老婆に何やら小声で囁やいた。

すると老婆は金髪の方を振り返つて、かう言つた。

「マーシエンカ！ お前はお客さまと御一緒に此処に待つておいで、そしてお退屈だらうから何かお話のお相手でもしていらつしやい！」

金髪の令嬢は客間に残つて、長椅子に坐つた。イワン・フョー

ドロキツチは、さながら針の蓆に坐る思ひで椅子に就くと、まつ赤になつて眼を伏せた。しかし令嬢は、まるでそんなことは氣にも止めないもののやうに、すました顔をして、長椅子に腰かけたまま、しきりに窓や壁を眺めたり、椅子の下をコソコソ駈け抜ける仔猫を見やつたりしてゐた。

イワン・フョードロキツチはやや勇氣を取り戻して、何か話しかけようと思つたけれど、まるでこちらへ来る途中、すつかり言葉といふものを落つこととして来でもしたやうに、彼の頭には何一つ、話題を思ひつくことが出来なかつた。

沈黙が十五分くらゐも続いた。令嬢は依然として坐つてゐる。やつこのことに、イワン・フョードロキツチは勇を鼓して、半

ば顫へ声で口を切つた。

「夏はどうも、たいへん蠅が多いですねえ、お嬢さん！」

「ほんとに大変なんですわ！」と、令嬢が答へた。「兄がわざわざ、母の古靴で蠅叩きを拵らへましたのですけれど、やつぱり、まだとても大変ですわ。」

これで会話は再び杜絶えてしまつて、イワン・フョードロキツチには最早それ以上、どうにも言葉のいとぐちを見つけることが出来なかつた。

その中に老主婦が、叔母さんや栗色髪ブリュネットの令嬢と一緒に戻つて

来てしまつた。それから、また暫らくおしやべりをしてから、ワシリーサ・カシユパロヴナは、是非泊つて行つて貰ひ度いとみ

んなから引き止められたけれど、老主婦や令嬢たちに暇を告げた。老主婦や令嬢たちは玄関まで客を見送つて、馬車の中から顔をのぞけてゐる叔母さんとイワン・フョードロキツチとに何時までも会釈を送つた。

「さあ、イワン・フョードロキツチ、お前さんは、あのお嬢さんと二人きりで、どんなことをお話しだつたえ！」と、叔母さんが途々たづねた。

「たいへん気立ての優しい、上品な娘さんですnee、あのマリヤ・グリゴリエヴナは！」とイワン・フョードロキツチが答へた。「時にイワン・フョードロキツチ、妾お前さんに真面目に話したいことがあるのだよ。お前さんもお蔭でもう三十八にもおなりだ

し、官等も決して恥かしくはないのだから、そろそろ子供のことを考へなきやなりません！ 何は措いてもお嫁を迎へることにしないでは……。」「

「何ですつて、叔母さん！」と、びつくりしてイワン・フョードロヰツチが叫んだ。「ヨ、嫁ですつて！ 以つての外です。叔母さん、ほんとに後生です……。あなたはまつたくこの僕に恥をかかせなさるんです……。僕はこれまで、まだ一度も、妻を持つたことはないんです……。妻なんて、いつたいどうするものだから、まるきり知らないんです！」

「ぢきお分りだよ、イワン・フョードロヰツチ、お分りだとも。」と、叔母さんは笑ひながら言つた。そして心の内で、しやうの

ない！ まるでねんねえで、何にも知りやあしないのだよ！ と  
眩やいた。それから声に出して彼女はつづけた。「でね、イワン  
・フョードロキツチ！ お前さんには、あのマリヤ・グリゴリー  
エヴナがほんとに似合ひだよ、あれ以上の嫁を探さうたつて、見  
つかるこつちやありません。それにお前さんにはあの娘が<sup>こ</sup>大變に  
気に入つておいでだし。妾はもうそのことで、いろいろあのお婆  
さんと談し合つたんだよ。あのお婆さんも、お前さんを娘の婿に  
することを、ひどく嬉しがつてるのだよ。しかし、あのグリゴー  
リイ・グリゴリーエキツチが何と言ふか、それは分らないけれど、  
あの人のことは考へないことにしよう。ただ万<sup>一</sup>にも持参金を呉  
れないやうだつたら、その時こそ訴訟を起して彼奴<sup>あいつ</sup>を……。」

ちやうどその時、馬車は邸に近づき、年老いた瘦馬は、己が厩の間近くなつたことを感づいて、急に活氣づいた。

「いいかえ、オメーリコ！ 馬には先づ、よく息を入れさせるんだよ。軛をはづして直ぐに水を飲ましちやいけないよ、癩が立つてをるから。それでさ、イワン・フォードロキツチ」と、馬車を降りながら言葉をつづけた。「妾はお前さんに、ようく、このことを考へておいて貰ひ度いのですよ。妾はまだちよつと台所を覗いて来なきやなりません。ソローハに夕食を言ひつけることを忘れてゐたが、あのぼんやりが独りで氣を利かせるやうなことは、ほつても無いからね。」

しかし、イワン・フォードロキツチはまるで雷にでも撃たれた

やうに立ち竦んでしまつた。なるほどマリヤ・グリゴリーエヴナは大変いい娘だ、しかし結婚！……それは彼には実に奇妙なことに思はれて、考へただけでもぞつとした。妻との同棲！ さつぱり分らない！ 自分の部屋に独りで落つくといふことも出来ず、年がら年ぢゆう、妻と鼻を突き合はせてゐなければならぬなんて！……彼は考へれば考へるほど、その顔に、脂汗がにじみ出して来るのであつた。

いつもより早目に彼は寢床へ入つたが、どんなに眠らうとしても、寐つくことが出来なかつた。しかし、やがてのことに、待ちに待つた、あの万人に共通な慰藉である睡魔が彼を訪れた。だが何といふ奇妙な夢を見たことだらう！ 彼は未だかつてこれほど

辻褄の合はぬ夢を見たことがなかつた。見ると、ぐるりがガヤガヤとぎはめき、グルグル おい、誰だ？ —— あたしよ、あなた  
 の妻よ！ さういふ声がぎはめきの中から彼に答へた。そして  
 不意に彼は夢から覺めた。と、今度はもう彼は妻帯してゐるのだ  
 が、彼等の家の中は実に奇妙なのだ。彼の部屋には一人用の寝台  
 ではなく二人用の寝台があつて、椅子には妻がかけてゐる。彼に  
 は実に変てこで、どうして妻の傍へ行つたものか、何といつて彼  
 女に話しかけたものか、さつぱり分らない。よく見ると、妻の顔  
 が鷺鳥の顔をしてゐる。傍らを見ると、もう一人の妻がゐて、や  
 つぱり鷺鳥の顔をしてゐる。また反対側を見ると、そこにも妻が  
 立つてゐる。うしろを向くと、そこにも妻が一人ゐる。そこで彼

はすつかりおびえあがつてしまひ、一目散に庭へ駈け出した。ところが、庭は蒸暑いので帽子を脱ぐと、帽子の中にも妻が一人坐つてゐる。汗がタラタラと顔を流れる。ハンカチを取り出さうとしてポケットへ手を突つ込むと、そのポケットの中にも妻がゐる。耳に詰めてあつた綿を取ると、そこにも妻が坐つてゐる……。そこで不意に、彼は片足でピョンとはねあがつた。すると、叔母さんが彼を見ながら、真面目くさつた顔つきで、さうさう、はねあがらなきや駄目だよ。今ぢや、お前さんはもう女房持ちだから。といふ。彼が傍へ近寄つて見ると、叔母さんだと思つたのが、もう叔母さんではなく、鐘楼になつてゐる。そして気がつくくと、誰かが彼を綱でその鐘楼へ釣りあげようとしてゐる。誰だ、俺

を釣りあげようとしてるのは？ と、イワン・フョードロキツチが情けない声で訴へた。 あたしよ、あなたの妻よ、あなたは釣鐘だから、釣りあげるのよ！ —— 違ふよ、俺は釣鐘ぢやない

よ、俺はイワン・フョードロキツチだよ！ と、彼が叫んだ。

いや、君は釣鐘だよ。 と、P××歩兵聯隊の聯隊長が、傍を

とほりながら言つた。すると今度は不意に、妻といふものが全く人間ではなく、一種の毛織物になつてゐるのだ。彼はマギリョー

フ市の或る商店へやつて行く。すると、どういふ布地きれぢが御入用

でございますか？ と、商人が訊ねるのだ。妻をお持ちなさい

ませ、近頃、これが最新流行の織物でございますよ！ 素晴らし

く上等の布地きれぢでございますして、皆さまがこれでフロツクコート

お拵らへになりますので。商人が尺を計つて、妻を断つ。イワン・フォードロキツチはそれを、小腋に抱へて猶太人の裁縫師の店へ行く。これあ駄目です。と、猶太人が言ふのだ。これ  
はくだらない布地きれぢですよ！こんな品でフロツクなど拵らへる者  
はありませんよ……。

恐怖のあまり、正気を失つたやうになつて、イワン・フォードロキツチは夢から醒めた。冷汗がタラタラと流れた。

朝になつて起きあがるなり、彼は占ひ本を開けて見た。その巻末には、珍らしく行き届いた書肆ほんやの親切で、簡単な夢占ひが附録につけてあつた。しかしその中にも、いつかう、さうした辻褃の合はぬ夢に該当するものは見当らなかつた。

それはさて、一方、叔母さんの頭の中には、全く新規な計画が成熟しつつあつた。それは次ぎの章を見てのお楽しみ。

——一八三三年——

## 青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 後篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年9月15日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第7刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 後篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコ著はすところの物語集」と小書きされています。

※「糸」と「絲」は新旧関係にあるので「糸」に書き替えるべき

ですが、底本で混在していましたので底本通りにしました。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ディカーニカ近郷夜話 後篇

## VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 イワン・フョードロ※ [#濁点付き片仮名キ、1-7-83] ツチ・シュポーニカとその叔母

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>